

# ①かかり釣りスタイル

穏やかな湾内に浮かぶ筏やカセに乗り、竿下を中心とした釣り座の周辺にいるチヌを釣るスタイルです。繊細な穂先で反応から水中の様子を読み取って作戦を構築してアタリを引き出す…。シンプルな仕掛けながら奥深い釣趣を持つだけに数釣りが特に楽しいスタイルです

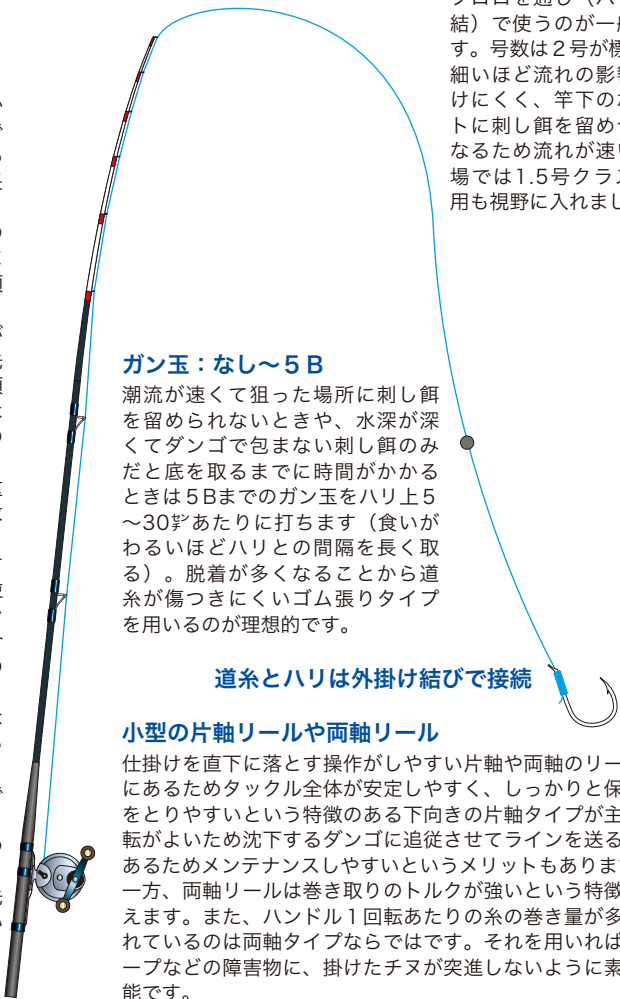
## かかり釣り竿1.5m前後

反応がしやすい繊細な穂先と、チヌの強い引きを受け止められるしっかりとした胴を備えた専用竿が必須です。基本となる竿下狙いの釣りであれば取り回しのよい1.5m前後の長さが標準です。

チヌのアタリはもちろん、餌取りの反応や潮の流れなど海中のさまざまな情報を表現してくれる穂先の種類は竿を選ぶうえで重要な要素です。調子の異なる多様なラインナップがありますが、大まかには硬調子（先調子）、軟調子（胴調子）の2種類にわけられます。いずれがよいかは釣行する釣り場の潮の状態や自身の釣り方によってかわります。

たとえば、潮流の速い釣り場にて重いオモリを使用するなら硬調子が求められます。その際に軟調子を使うと穂先が曲がり過ぎて反応を表現するマージンがなくなるからです。逆に、波による上下動が大きくてダンゴから刺し餌が早く抜けたり、早合わせになりがちな場合など、穂先の強い反発力がマイナスに作用するときは軟調子が有効です。いろいろな釣り場で、さまざまな釣り方をするということならオールラウンドタイプといえる中硬調子を選ぶとよいでしょう。

なお、小さな反応を表現させるために繊細に仕上げられている穂先はとも折れやすいです。予備の穂先（たいていの市販品にはついてる）は必ず持参しましょう。



## ガン玉：なし～5B

潮流が速くて狙った場所に刺し餌を留められないときや、水深が深くてダンゴで包まない刺し餌のみだと底を取るまでに時間がかかるときは5Bまでのガン玉をハリ上5～30号あたりに打ちます（食いがわるいほどハリとの間隔を長く取る）。脱着が多くなることから道糸が傷つきにくいゴム張りタイプを用いるのが理想的です。

## 道糸とハリは外掛け結びで接続

## 小型の片軸リールや両軸リール

仕掛けを直下に落とす操作がしやすい片軸や両軸のリールを使用します。近ごろは、重心が竿より下にあるためタックル全体が安定しやすく、しっかりと保持できることから穂先がブレにくくてアタリをとりやすいという特徴のある下向きの片軸タイプが主流です。また、片軸タイプは、スプールの回転がよいため沈下するダンゴに追従させてラインを送るのにも適しています。さらに、構造が単純であるためメンテナンスしやすいというメリットもあります。

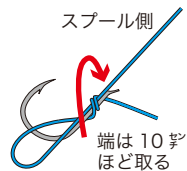
一方、両軸リールは巻き取りのトルクが強いという特徴があり、大型とのやり取りもスムーズに行なえます。また、ハンドル1回転あたりの糸の巻き量が多い（ギヤ比の高い）タイプがラインナップされているのは両軸タイプならではです。それを用いれば、ラインレイクの可能性が高いカキ棚やロープなどの障害物に、掛けたチヌが突進しないように素早くラインを巻き取るといったやり取りも可能です。

## 道糸：フロロ1.5～2号

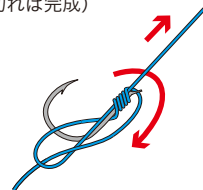
比重が重くて潮なじみがよく、耐摩耗性に優れるフロロを通し（ハリを直結）で使うのが一般的です。号数は2号が標準的。細いほど流れの影響を受けにくく、竿下のポイントに刺し餌を留めやすくなるため流れが速い釣り場では1.5号クラスの使用も視野に入れましょう。

## ハリの結び方 ※外掛け結び

①ハリに沿わせてハリスを折り返して軸に巻きつける



②4～6回巻いたら折り返して下の輪に通す。スプール側の道糸を引いて輪を締める（端を切れれば完成）



## チヌバリ2～3号、伊勢尼6～8号

使用する餌の種類やサイズに合わせて選択します。餌取りの状況にもよりますが、基本の餌である沖アミであればチヌバリ2～3号、伊勢尼6～8号がマッチします。